

薔薇のつぼみ

宰相・山本権兵衛の孫娘

村松友視

集英社文庫



集英社文庫

薔薇のつばみ—宰相・山本権兵衛の孫娘—

昭和61年 5月25日 第1刷

定価はカバーに表
示してあります。

著 者 村 松 友 視

発行者 堀 内 末 男

発行所 株式会社 集 英 社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101

(238) 2842 (編集)

電話 東京 (230) 6171 (販売)

(238) 2964 (製作)

印 刷 中央精版印刷株式会社

本書の内容の一部または全部を無断複写、複製、転載することを禁じます。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

©T. Muramatsu 1986

Printed in Japan

ISBN4-08-749106-4 C0193

集英社文庫

薔 薇 の つ ぼ み

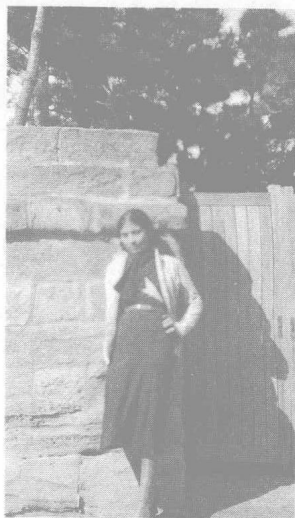
—宰相・山本権兵衛の孫娘—

村 松 友 視



1932年4月の撮影と記されている。20歳を目の前にしていた昭和5年のこの時期，祖父は国家の重臣として遇され，孫娘は麗わしくも華かな令嬢時代を謳歌していたと思われる。





1931, 2 年頃, 18-20 歳までのスナップ写真。葉山の家で。

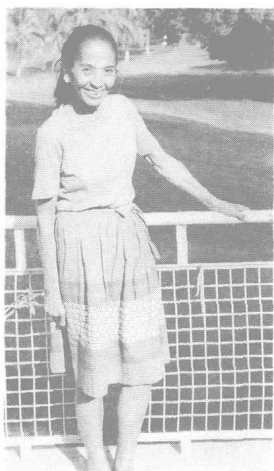
HASTA LA VICTORIA SIEMPRE



1972年、キューバへ働きに来た砂糖キビ刈り部隊の若者たちとの記念写真（前列左より3人目）。揃いのトレーナーの胸の「チェ」のマークはゲバラの意。



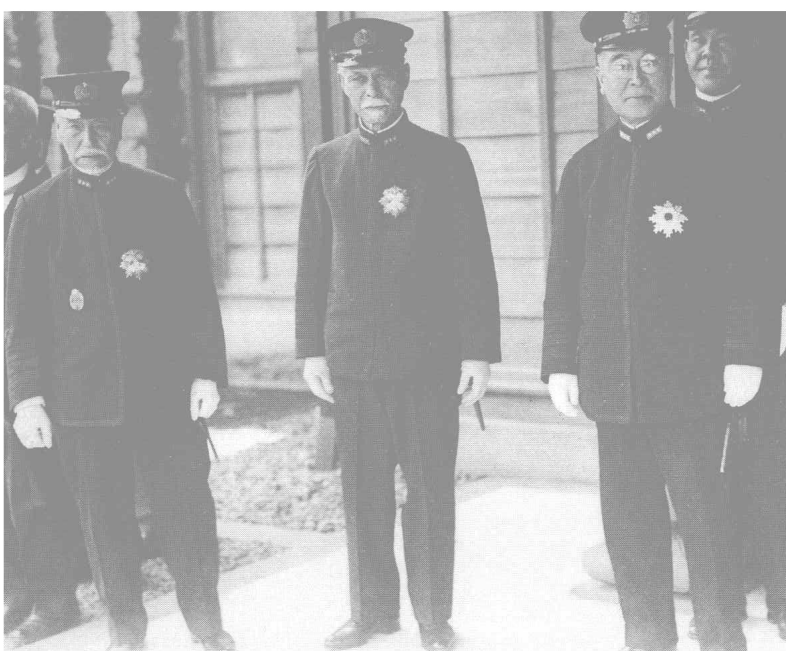
1976年、親交のあった闘牛のスーパー・スター、マノロ・マルティネスと語りあう。



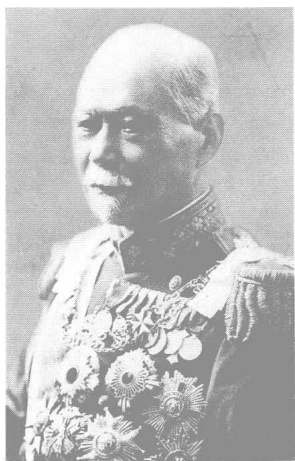
1986年春、アカブルコを訪ねた村松友視氏と(上)。満喜子さんは、忙がしいあい間をみて子供たちに合気道や日本語や着物の着付けを教えている。



1932年のクリスマス・パーティーの日の記念写真とある。



(左)明治日本海軍の提督たち。左から東郷平八郎、山本権兵衛、安保清種。(右)海軍大将山本権兵衛、大勲位菊花大綬章の正装(左)と略装(右)



薔薇のつぼみ

1

私が、山本満喜子という名前を強く意識したのは、メキシコ・シティのあるレストランでテキーラを飲んでるときだった。メキシコ特有の青いレモンに塩をこすりつけ、それをかじりながらテキーラを味わっている私の耳に、“山本権兵衛ごんのひょうえの孫娘”という言葉がどこからともなくとびこんできた。あれが、私の側からの山本満喜子さんへの最初の出会いと言っていいだろう。

四年ほど前、あるテレビ番組の取材でメキシコ南部地方を訪れた私は、取材スケジュールが終ったあとの一日だけの休暇を、メキシコ・シティで楽しんでた。短い時間だが思い切りテキーラやマルガリータを飲み、メヒコ（メキシコ・シティ）の街を味わってやろうと思っていた私の耳に、“山本権兵衛の孫娘”というフレーズがとびこんできた。そのとたん、私の軀からだの底に沈んでいた何かが、ぐらりと揺れてゆっくりと浮上しはじめたのだ。

メキシコの地で「山本権兵衛の孫娘」と口ばしるのだから、その声の主はもちろん日本人だった。そして、その声音にはさまざまなニュアンスが込められているようだった。声の主は中年の男性だったが、相手の質問に対して答えている言葉の中で、山本権兵衛の孫娘と言ったらしかった。質問者が、アカプルコに住んでいる山本権兵衛の孫娘である満喜子さんの、消息をたずねたのか単に話題として名を出したのか、それはよく分らなかった。ただ、それに答えた中年男性の声音に込められたニュアンスが、なぜか私を強く刺激したのだった。山本権兵衛の孫娘……そう発音した中年男の声に、心地良さと重苦しさが交錯していた。その男は山本満喜子当人との知り合いではなさそうだったが、彼女についての情報も評判も知り尽しているようだった。そういうデータを頭の中へぶち込んでシェークしても、どうも自分の思っている色や味が出ない……男の声は、そんな悩みを抱くバーテンダーみたいだった。その声が、私の耳に貼りつき、さっき軀の底から浮上した何かが、今度はごろんと前へ転がった――。

ほぼ三週間近くをテレビ取材に費やし、メキシコに対してそれなりの好奇心がスタートした矢先、私の軀の内側にトゲのように刺さったフレーズ、それが「山本権兵衛の孫娘」だったのだ。そしてそのとき、私はかならずその「山本権兵衛の孫娘」たる満喜子さんに、本当に出会うことになるだろうという予感を抱いたのだった。それは、心地良さと重苦し

さが交錯した男の声音……そのニュアンスの謎に向って、私自身が旅をすることの予感であつたかもしれないのである。

さて、山本権兵衛とは、我々にとってどんなイメージなのか。ちなみに「広辞苑」を引いてみれば、「軍人・政治家。海軍大将。鹿児島の人。日露戦争当時の海相。大正二年首相となり、翌年シーメンス事件の責を負うて辞任。関東大震災の翌日、再び首相となる。薩閥の代表的政治家。（一八五二―一九三三）」と出ている。また、江藤淳氏の「海は魅

える」が、「山本権兵衛という、日本海軍興隆期の裏方の生涯をたどりながら、明治の側面を描くという構想」によって書かれたことが、作者の「あとがき」の中で述べられている。つまり、日本近代史を語るについて、とくに政治的観点を加えるならば、見すごすことのできない人物であることが分る。

また、山本権兵衛について書かれた本を採すならば、村上貞一「偉人山本権兵衛」、山本伝記編纂会編「伯爵山本権兵衛伝」、鷲尾義直「英傑山本権兵衛」、中村嘉寿「海軍の父山本権兵衛」、「人間山本権兵衛」、松波仁一郎「東郷元帥と山本権兵衛」、永松浅造「海軍の父山本権兵衛」、山本英輔（権兵衛の甥）「山本権兵衛」、「山本権兵衛メモ」、山本清（満喜子の父）「山本権兵衛伝」上下、米沢藤良「山本権兵衛」などがあり、「文藝春秋」（昭和三十九年）や「改造」（昭和十一年）に掲載された、高木惣吉の山本権兵衛についての文章

も残っている。

つまり、山本権兵衛は日本近代における重要人物のひとりであることがあざやかにつかめるのだが、私の関心は山本権兵衛を軸とするものではない。山本権兵衛を祖父にもった「孫娘」の生き方、生きざまに光を当てて、ひとりの女性を浮彫りにしてみたいというアングルだ。「孫娘」と自らを規定し、他人にもそう形容される満喜子さんのエネルギーの流儀を、私なりに考えてみたい……それが、メキシコから帰ってしばらくしてから私の中で固まってきた思いだった。そして、このアングルには、私自身の個人的こだわりがからみついているのかもしれない。

山本満喜子という名前は、私にはメキシコ・シティのレストランで聞いたのが初耳ではなかった。山本満喜子という名は、ある時期かなり週刊誌に登場した。ややスキャンダルめいた賑やかしの記事もあったが、そのたびに「山本権兵衛の孫娘」という形容がついていたように記憶している。

満喜子さんが登場した活字世界も、かなりの数にのぼる。彼女の父である山本清による「山本権兵衛伝」の中の山本家系図に出てくるのは当然として、一九七〇年八月号の「現代の眼」に「キューバ砂糖黍奉仕部隊報告・キューバへの道」という満喜子さん自身の文章、「週刊文春」の「田宮は朝鮮オレはキューバ。赤軍派の祖」加藤登紀子の恋人」と